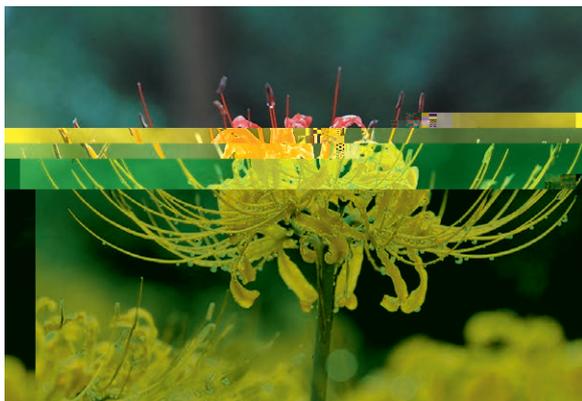




広島大学

# 環境 報生 口書

2018



Environmental Report 2018

## 目次

学長ステートメント .....	2
広島大学基本理念・環境基本理念・行動方針 .....	3
大学概要 .....	4
環境管理体制 .....	5
2017年度の目標と実績 .....	6
環境教育 .....	7
・教養教育における環境教育	
・工学部・工学研究科における環境教育	
環境研究 .....	10
・キャンパス内の動植物に関する研究	
社会貢献・国際貢献・学生活動 .....	13
自然環境 .....	17
・キャンパスの自然環境の保全	
・キャンパスの哺乳類調査	
・東広島キャンパスのユスリカ	
・キャンパスぶらり散歩 - H P による情報公開 -	
環境負荷削減 .....	21
・エネルギー消費状況と取組	
・水投入量と削減対策	
・コピー用紙購入量と削減対策	
・廃棄物発生量と削減対策	
・マテリアルバランス	
環境リスク低減 .....	26
・安全衛生管理体制	
・化学物質等の管理	
・実験廃液処理・管理	
環境に関する規制等の遵守状況 .....	28
環境報告ガイドライン（2012）との対照表 .....	29
第三者コメント・環境活動評価委員会コメント .....	30
キャンパスマップ，編集後記 .....	31

## 編集方針

本報告書は、本学の環境活動について、構成員のみならず広く学外関係者にもご理解いただくために作成しております。

なお、本報告書は、本学の公式ウェブサイトにも掲載しております。  
<https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/initiatives/kankyo>

## 報告書対象組織

全キャンパス（学生宿舎・職員宿舎を除く）

## 期間

2017年4月～2018年3月

## 発行日

2018年9月  
 （前回発行日：2017年9月）  
 （次回発行予定：2019年9月）

## 報告対象分野

環境的側面，社会的側面

## 準拠基準等

・環境配慮促進法  
 ・環境報告ガイドライン（2012）

## 編集部署

広島大学環境マネジメント委員会  
 環境報告書作成専門委員会

## お問い合わせ先

財務・総務室 財務・総務部 総務グループ  
 〒739-8511 広島県東広島市鏡山一丁目3-2  
 電話：082-424-4474  
 FAX：082-424-6020  
 E-mail：risk-anzen@office.hiroshima-u.ac.jp

表表紙の写真 「東広島キャンパスの動植物」  
 上から「アメリカハナズオウとクマバチ」「イヌタヌキモ」  
 「ミツガシワとモノサシトンボ」「アケボノソウ」  
 「ヒガンバナ」

裏表紙の写真 「キャンパスの四季・春夏秋冬」  
 左上「フジとアケボノフジ」左下「ハナミズキとカイノキ」  
 右上「トケイソウ」右下「スズメ」

# 学長ステートメント



広島大学長 越智 光夫

2018年7月に発生した西日本豪雨災害により、お亡くなりになられた方々へ謹んで哀悼の意を表しますとともに、被害に遭われた皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

広島大学では、学生ボランティアの派遣、学内募金の開始とともに、豪雨災害の総合的な学術調査団「広島大学平成30年7月豪雨災害調査団」を立ち上げました。学内の防災研究分野の専門家を集め、広範囲にわたる土石流・斜面災害、水文気象・洪水・氾濫、生活インフラ被害および公衆衛生・医療について専門的見地から調査・解明を行っています。かつて経験したことがない甚大な災害に対し、被災者の皆様に寄り添い、力を合わせて立ち向かって参ります。

広島大学は、12学部、11研究科を擁し、約1万5千人の学生が学ぶわが国有数の総合研究大学です。東広島キャンパス、広島市内に医療系の霞キャンパス、大学発祥の地である東千田キャンパスの3つのキャンパスがあります。2018年度からは12番目の学部である情報科学部と総合科学部に国際共創学科がそれぞれ発足するなど、新たな飛躍に向けての挑戦を開始しました。

本学は、2013年度に文部科学省の「研究大学強化促進事業」22機関に採択され、2014年度には文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」トップ型13大学のひとつに中四国地方で唯一選ばれています。世界大学ランキングトップ100位以内に入ることは、本学が社会と交わした約束であり、現在のそして未来の学生のために素晴らしい教育研究環境を用意することは、私たち構成員の使命でもあります。

メインキャンパスである東広島キャンパスは、緑豊かで、東京ドームのほぼ53個分という広さです。このような素晴らしい自然環境とゆとりのある建物配置は、豊かな人間性を育むための最高の環境です。地域の方が気軽に立ち寄り、キャンパス内の自然を感じながら散策していただだけ、さらに地域の環境学習にキャンパスの自然環境を役立てるなどの取組も進めています。

さらに、教育研究活動の基盤である大学キャンパスの質的向上、教育研究成果による社会貢献及び大学のミッションやアカデミックプランの実現のため、キャンパス空間の将来像に向けた施設・環境整備とその管理・運営の拠り所となる指針として、「広島大学キャンパスマスタープラン2016」を策定し、持続可能な地域社会を牽引するサステナブル・キャンパスを目指しています。

食料やエネルギー不足、環境汚染や環境破壊など、克服すべき多くの課題を抱える現代社会において、地球環境を保全し、環境負荷削減に取り組むことは、私達に課せられた使命であり、大学においても、教育、研究、社会貢献活動等を通じて環境保全に貢献することが必要です。

こうした問題には、細分化された一専門分野だけで対応できるものではなく、今こそ全体を俯瞰できる知を備えた人材が求められています。本学では、世界で最初の被爆地に開学した大学の使命として、文部科学省の博士課程教育リーディングプログラム「放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム」による「放射線災害復興学」の国際的な専門家の育成や、教養教育においては、戦争・原爆・貧困・飢餓・人口問題・環境などをテーマにした「平和科目」を新入生に必修として履修させるほか、多くの環境関連科目を開設し、学生に環境問題への理解を深める機会を提供しています。

また、本学では2万人を超える学生・教職員が活動しているため、周辺環境や地域環境に与える負荷を考慮し、エネルギー消費、廃棄物排出、水使用、コピー用紙使用の削減に取り組んでいます。構成員一人一人が省エネをはじめとする環境負荷削減の必要性を理解し、自主的に取り組んでいくことが重要だと考えます。

環境報告書では、本学の環境基本理念・行動方針に基づく、環境目標、環境教育・研究、環境負荷の軽減に向けた取組などを紹介しております。本学の環境問題解決に向けての姿勢と取組を皆様にご理解いただくとともに、学生・教職員が環境問題を正しく認識し、持続可能な社会構築へ貢献するための一助となることを祈念しております。

## 広島大学基本理念

「自由で平和な一つの大学」という建学の精神を継承し、  
理念5原則の下に、国立大学としての使命を果たします。

平和を希求する精神

新たな知の創造

豊かな人間性を培う教育

地域社会・国際社会との共存

絶えざる自己変革

(1995年10月17日策定)

## 環境基本理念

地球環境を保全し、持続可能な社会を構築することは21世紀の人類最大の課題であるとの認識に立ち、単に環境負荷削減に取り組むだけでなく、教育・研究・社会貢献を中心とした大学の全ての活動・行動を通じて、地域社会・国際社会との連携の中で環境負荷削減に取り組み環境保全に貢献するよう努める。

(2006年5月23日策定)

## 行動方針

大学内外における環境教育を通じて、環境に対する高い問題意識と知識をもつ人材を育成する。

地域・地球環境の保全、持続可能な社会の構築に向けた先進的・実践的な研究を推進する。

大学が蓄積し、創造してきた知的財産を広く社会に還元し、地域社会・国際社会における環境保全活動に貢献する。

全ての活動において、環境関連法令を遵守し、環境負荷の削減と自然環境の保全に努める。

環境報告書を通じて、広島大学の環境に関する取組を積極的に公開し、社会との共生を図る。

(2006年5月23日策定)

## 名 称

国立大学法人広島大学

## 所在地

広島県東広島市鏡山一丁目3-2

## 学 長

越智 光夫

## キャンパス

東広島キャンパス（東広島市鏡山）  
霞キャンパス（広島市南区霞）  
東千田キャンパス（広島市中区東千田町）  
他（31ページ参照）

## 学部等数

学 部：11	附置研究所：1
研 究 科：11	病 院：1
専 攻 科：1	附属学校園： 銜者(三)企(三)蜈六

# 地区別施設等状況

2017年4月1日現在

# 環境管理体制

## 環境マネジメントシステムの状況

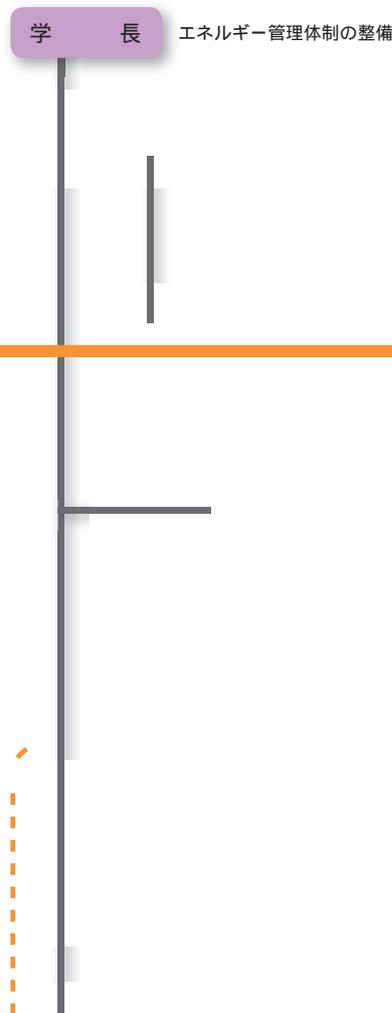
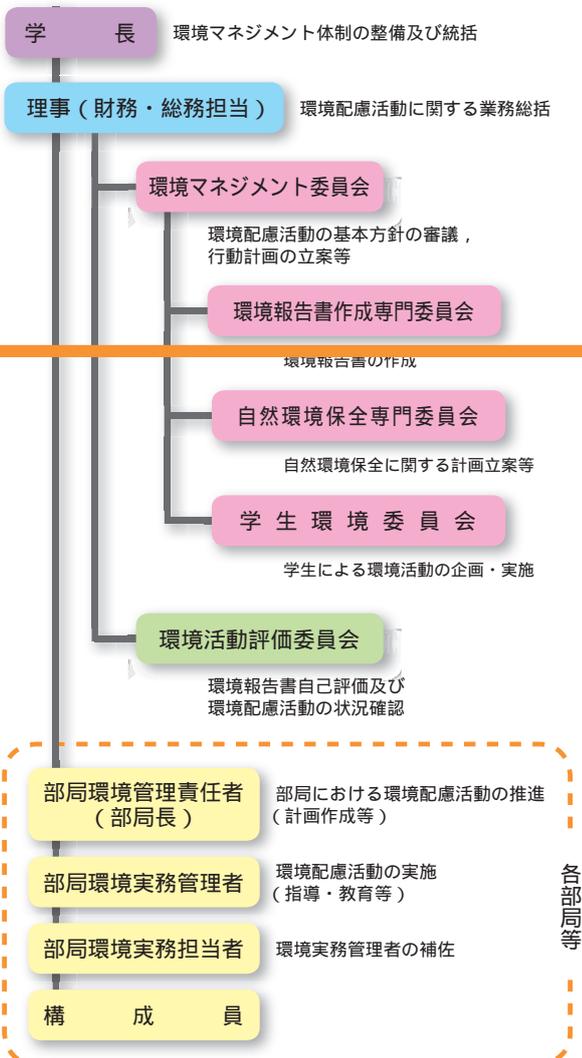
広島大学では、学長をトップとする環境マネジメントシステムを構築しています。2011年4月1日から「広島大学環境マネジメント規則」を制定し、環境配慮活動における責任の所在を明確にし、内部統制のとれた体制を確立することを目的として学長、理事及び部局長の責務を明確にしました。

また、2012年3月には、「広島大学環境活動評価委員会内規」「環境マネジメント実施要領」「部局等における環境マネジメントの実施に関する要領」を制定し、それぞれの役割を具体的に明文化しました。

さらに、2013年3月には、学内の自然環境保全における様々な問題を検討・解決していくため、新たに自然環境保全専門委員会を設置しました。併せて、既存の委員会組織を見直し、環境配慮活動に関する計画立案を担っていた環境配慮対策検討専門委員会を廃止し、環境マネジメント委員会が環境配慮活動の基本方針から実施方策及び具体的な活動の企画立案までを担当することとしました。2014年10月には、環境目標を達成するために、教職員だけでなく、学生も主体となって活動できるよう、学生環境委員会を設置し、環境マネジメント体制を強化するとともに、環境配慮活動の更なる推進を目指しています。なお、環境に関する組織体制は3系統あり、全体としての環境マネジメントの他に省エネ法に対応したエネルギー管理体制、労働安全衛生法に対応した安全衛生管理体制があります。（安全衛生管理体制は26ページを参照）

### 環境マネジメント体制

### エネルギー管理体制



# 2017年度の目標と実績

環境マネジメント委員会において策定された環境目標に基づいて、各部署等において目標及び実施計画を作成し、年間を通して環境配慮活動を実施しました。各部署等から半期ごとに報告される実績報告を取りまとめた結果を基に、環境活動評価委員会において活動状況を確認し、評価した結果の概要は以下のとおりです。

区分	環境目標	達成度	主な活動実績
環境教育・研究の推進	環境・安全教育の全学実施		<ul style="list-style-type: none"> <li>専任衛生管理者による安全衛生教育を実施（対象：新入生・新規採用職員ほか）</li> <li>産業医・専任衛生管理者による月1回の安全衛生重点巡視を実施</li> <li>環境報告書ダイジェストを作成し、学内構成員への周知を実施</li> </ul>
	教養教育、専門教育等を通じた環境意識の醸成		<ul style="list-style-type: none"> <li>教養教育、専門教育等において環境問題の歴史、地球温暖化、水質汚濁、自然景観観察の野外教育等、多数の環境関連講義を実施</li> </ul>
	環境研究の連携強化と促進		<ul style="list-style-type: none"> <li>複数研究科等の研究者から成るチームによる環境関連研究課題を推進</li> <li>食料・環境問題に関する国際シンポジウムの開催</li> <li>環境調査活動を継続</li> </ul>
社会貢献の推進	地域社会・市民と連携した環境保全活動の推進		<ul style="list-style-type: none"> <li>一般市民を対象にした植物観察会を実施</li> <li>練習船を利用して地域住民を対象にした野外観察会を実施</li> <li>附属学校園周辺の清掃活動を実施</li> </ul>
	地域・国際社会の環境問題解決に向けた取り組みの推進		<ul style="list-style-type: none"> <li>東広島市において光害実態調査を実施</li> <li>東広島市内の河川に生息する天然記念物オオサンショウウオの分布調査を実施</li> <li>学生環境委員会が「東広島市環境審議会」に委員とし参画。</li> </ul>
	学校教育から生涯学習までの地域環境教育への貢献		<ul style="list-style-type: none"> <li>公開講座における環境関連の講演会を開催</li> <li>市民を対象とした体験学習、実習授業を実施</li> <li>「学生環境委員会」等が環境に関連するイベントを開催。</li> </ul>
自然環境の保全	キャンパス内の生物相の把握		<ul style="list-style-type: none"> <li>裏山の生態系をみる授業の実施</li> <li>東広島キャンパスの哺乳類相の調査を継続的に実施</li> </ul>
	キャンパス内の生物多様性を守る生態系管理体制の構築		<ul style="list-style-type: none"> <li>自然環境保全専門委員会において、生態系管理体制構築に向けて課題を検討</li> </ul>
	キャンパスの自然環境の管理・保全の実施		<ul style="list-style-type: none"> <li>植物管理室によるキャンパス内の植生管理を実施</li> <li>樹木の水やり、剪定、害虫駆除を実施</li> <li>学生教職員が一斉清掃活動を実施</li> </ul>
資源の有効利用の推進	エネルギー使用原単位の削減 ・2015年度比2%削減 ・2021年度までに2015年度比6%削減	×	<ul style="list-style-type: none"> <li>エネルギー原単位：2015年度比2.8%増加</li> <li>一部エレベータの稼働停止や自動扉の開放を実施</li> <li>電力消費量の掲示による周知や教授会等において使用量を報告</li> <li>照明設備・空調機等の省エネ型へ順次更新</li> </ul>
	水使用量の削減と資源化の促進 ・水使用量の削減（2012年度実績（過去7年間の最低使用量）より減） ・2016年度実績より減 ・水再利用の促進		<ul style="list-style-type: none"> <li>上水使用量：2012年度比10.4%減：前年度比1.5%減</li> <li>トイレの洗浄水の水量調節、節水型の導入</li> <li>循環型冷却装置を利用</li> <li>ポスター等の掲示や教授会等において周知徹底を行った</li> </ul>
	廃棄物の削減と資源化の推進 ・資源化促進による可燃ごみ排出量の削減 ・2015年度比2%削減 ・2021年度までに2008年度実績まで削減		<ul style="list-style-type: none"> <li>可燃ごみ廃棄量：2008年度比0.5%増加：2015年度比2.3%減</li> <li>ごみステーション巡視による分別状態の把握と改善指導を実施</li> <li>ポスター等の掲示により紙ごみの分別徹底と資源化を推進</li> </ul>
	コピー用紙購入量の削減 ・2016年度実績より減 ・2014年度実績（過去7年間の最低購入量）より減	×	<ul style="list-style-type: none"> <li>コピー用紙購入量：2014年度比4.0%増加：前年度比3.9%増加</li> <li>会議録の電子掲載、両面コピーによる紙使用量を削減</li> <li>タブレット型情報端末等を利用したペーパーレス会議を推進</li> </ul>

○：目標を達成      ◐：目標を一部達成      ×：目標を未達成



## 工学部・工学研究科における環境教育

### 基礎無機化学（工学部第三類 専門基礎科目）

科学技術は我々の生活の質の向上と維持に大いに貢献してきました。しかし、同時に資源（エネルギー・物質）の大量消費をもたらすとともに、酸性雨，地球温暖化，公害などの環境問題もひき起こしてきました。今後，人類が持続可能な社会を実現していくうえでは，地球環境問題を意識した化学的なアプローチが重要となっ  
ていきます。本講義では，無機化学全般の基礎を学修していきますが，「環境と無機化学」のトピックについても取り上げ，オゾン層破壊，地球温暖化，酸性雨などについて化学の視点でそれらのメカニズムを解説するとともに，光触媒材料などの環境浄化に活用される新しい技術なども概説します。

工学研究科  
片桐 清文 准教授

### 建築環境学 ・ （工学部第四類 専門科目）

建築物の設計・計画においては，必要な大きさの部屋が使いやすく配置されているかどうか，地震や台風などの災害に対して安全かどうかのほかに，人間がストレスなく快適に活動できる室内環境が保たれているかどうかも重要です。建築環境学では，熱や光，音や空気などの物理要素の適切な状態や，その状態を保つための制御技術の基礎を学びますが，その中では空調や照明などでのエネルギー消費量が何によって決まるのか，どのように削減できるのかも重要な学習課題の一つです。民生用エネルギー消費量の削減が要求されている現在，この講義で様々な環境負荷低減技術の応用力が身につくことを期待しています。



工学研究科  
西名 大作 教授

### グリーンテクノロジー

石油化学製品や農薬の利用など，私達の便利で快適な生活は様々な化学物質によって支えられてきました。しかしながら，化学物質の使い方を誤ると，動物や植物，そして人間に深刻なダメージを与えます。このため，化学物質の性質や影響を理解しながら，適切に利用することが重要となります。本講義では，これまでの化学物質政策の系譜を学んだ後に，化学物質の物理化学的性状，分解性の評価とその化学物質管理への利用について学修します。さらに，化学物質のリスク評価とその管理方法についても解説し，化学産業を担う化学技術者にとって必要な知識や能力を修得します。



工学研究科  
中井 智司 教授

## 自然環境システム（工学部第四類 専門科目）

陸・海・空相互の自然環境システムは地球の気候変動などに重要な役割を果たしています。自然環境システムの講義では、中でも大気と海洋の自然環境システムに焦点をあてて説明します。この講義の前半は大気の鉛直構造・熱力学、降水過程、熱放射、運動、大気計測法などについて、後半では海水の物性、波浪、海洋の生物、海洋計測法などについてそれぞれ解説します。また両者の相互作用により生じるエルニーニョ現象のメカニズムの解明などにも言及しています。



工学研究科  
作野 裕司 准教授

## リモートセンシング工学（工学部第四類 専門科目）

地球環境モニタリングや自動車や船舶の形状測量など、環境関連や輸送機器に関する工学的な問題を把握する上で、今やリモートセンシング（RS）技術（遠隔計測）は欠かせない技術となっています。この講義では、比較的身近な写真測量技術の基礎、応用から始まり、衛星RSの基礎、応用技術（陸域、大気、海洋の観測）について解説します。最終的に身近な環境現象に応用できるRS技術や知識を身につけることを主な目標としています。

## 環境保全論（工学部第四類 専門科目）

激甚的な公害を経験し、それを克服してきた日本ではあるが、公害問題は現在も抱えており、さらに地球温暖化などの国際的な環境問題の脅威にさらされています。また、環境保全は持続可能な発展の社会構築と強く関係しています。環境保全対策は、過去の歴史から学べるものが多くあり、科目「環境保全論」では公害を克服してきた環境政策の歴史の変遷を概説すると共に、これまでの経験から明らかになった環境政策の原則や環境政策の手法などについて解説します。



工学研究科  
大橋 晶良 教授

## 環境保全工学特論（専門科目）

環境問題はエネルギーと強く関係しています。また、自然のみならずあらゆる現象は、エネルギーの法則に従っています。このため、環境問題やエネルギー問題を把握する、さらに解決する上で欠かせない学問である熱力学の基本と応用を理解する必要があります。科目「環境保全工学特論」では、難解と言われる熱力学をシンプルな基本法則だけで習得できるよう、熱力学の本質のアプローチから、熱力学とは何か、熱力学が何を教えてくれるのか、熱力学による化学現象の説明を、エネルギーと環境との関係を交えながら、熱力学の基本的な理論を講義と演習を通して解説します。







# 社会貢献・国際貢献・学生活動

大学は、学生への教育・研究だけでなく、市民への知の提供・還元の間としてもその役割が期待されるようになってきています。本学においても、学生・教職員が、それぞれの知識・経験・能力を生かして、本学以外の組織・団体とも連携を図りながら地域・世界に貢献する活動を行っています。そして、これらの活動を通じて学生のみならず教職員も多くのことを学び、成長を続けています。また、本学の環境保全活動、普及啓発活動において、学生との協働は欠かせないものであり、学生の教育の側面からも重要なことだという認識が高まりつつあります。

本報告書では、本学の様々な社会貢献・国際貢献・学生活動の中から、教職員による社会貢献活動として、2018年2月28日開催「バイオマス産業都市構想へのアクション」のシンポジウムを、国際貢献活動として「フィリピン・マニラ首都圏を流れるパシッグ川の浄化のための実践的研究」を、学生活動として「いきもの会」、広島大学霞清掃サークル「KEEP」、学生環境委員会・サポーター」を紹介します。

## 社会貢献活動

### 2018年2月28日開催のシンポジウム 「バイオマス産業都市構想へのアクション」について

本シンポジウムは、総合科学研究科（特に21世紀科学プロジェクト群が中心）主催で東広島市市民文化センター（アザレアホール）において実施した。21世紀科学プロジェクト群「資源エネルギー

研究プロジェクト」では、毎月地域の方々とも情報交換と議論を目的に「地域エネルギー（資源・環境）自立について考える交流会」を主催するとともに、年に2回関連のテーマでの公開シンポジウムを実施し、今回もその一環として開催したものである。特に、昨年7月に東広島市がバイオマス産業都市構想として県内で初めて7省庁合同によって選定されたことをきっかけに、市役所でのヒアリングを行い、その計画が市役所を中心とした森林組合による木材を活用したバイオマス発電と（株）サタケによる菌床キノコ栽培などの推進であることが確認され、シンポジウムに至る議論が行われてきた。以上の経緯から、大学の知見、企業の現状、住民の状況などについての多様な話題提供をお願いするとともに、大学や住民などの貢献や役割、さらなる推進への課題について議論することを目的にシンポジウムを開催した。ここでは、そもそも東広島市民の関心が低い点、大学の役割が限定的な点、市役所の推進力も不透明な点などが課題として整理され、特に成功事例などに関する講演を「鉾一園すぬ市栖荊そぬし

## 国際貢献活動

### フィリピン・マニラ首都圏を流れるパシッグ川の浄化のための実践的研究

マニラ湾とラグナ湖を結んでマニラ首都圏の中心を流れる Pasig (パシッグ) 川は本川長27km に対し、延長約1,800km におよぶ47の支流・水路 (estero) が複雑に入り組んでいます。パシッグ川の支流・水路には生活排水が直接流入し、支流・水路の全長にわたって過剰な有機物により汚濁しています。パシッグ川の再生 水域の環境改善、観光利用については、大統領府下に組織された複数の省庁によるコンソーシアムであるパシッグ川再生委員会 (Pasig River Rehabilitation Commission: PRRC) が担っています。PRRC はパシッグ川環境整備 (不法住居の撤去、ゴミ回収等)、水質改善に努力していますが、水質浄化では所望の成果が得られていないのが現状です。パシッグ川は極度の富栄養状態にあり、臭気等の問題が顕著な水路です。貧困地域においては狭い空間においても多くの人々の生活を担う場所であり、生活排水は水路に流すことが最も清潔な手段であ

るため、水路周辺は貧困層の密集地となっています。

フィリピン大学、PRRC と共同して水質浄化プロジェクトを開始したサンミゲル水路はマニラ湾からパシッグ川の約4.5km 上流地点で本川に並行して流れる全長約3km の水路です。写真はサンミゲル水路において浄化構造体を構築した際のセレモニーがTV 放映された時の様子です。本プロジェクトでは浄化構造体の有効性を評価して石炭灰造粒物 (GCA) の浄化能力を示すことでパシッグ川の再生に貢献できる環境修復材であることを実証しています。手づまり状態にあるパシッグ川の水質問題を広島大学発の GCA 技術により解決し、マニラ首都圏の水環境の再生に寄与することを目的にフィリピン大学と共同で研究を進めています。



工学研究科  
日比野 忠史 准教授



浄化構造体の構築状況とフィリピン TV で日本の技術として紹介されました

(PRRC, UPD, 広大で共同して構築、構築は日本とは異なり自治体から雇用される若者が実施します。右上は PRRC executive director のアントニオさんです。)

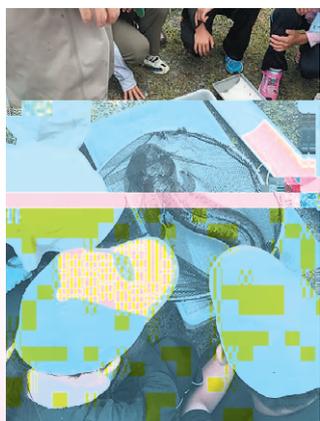
# 社会貢献・国際貢献・学生活動

## 学生活動

### いきもの会の活動

私たちいきもの会は、主に自然観察を行っています。

毎年学園祭では、キャンパス内のビオトープで子供たちと一緒に泥んこになりながら生き物採集をし、捕まえた生物の同定を行います。広島県の



地域の子供たちとオオサンショウウオの測定をする様子

準絶滅危惧種であるアカガエルやイモリなども見つかりますが、一方で外来種のアメリカザリガニ、改良品種のヒメダカなども見つかっています。アメリカザリガニやヒメダカは駆除していますが、一度定着してしまったものは根絶するのが難しく、ほとんど効果がないのが現状です。し

かし、この活動は子供たちに外来種問題の深刻さや自然と触れ合う楽しさを知ってもらうよい機会だと考えています。

その他にも私たちは、オオサンショウウオの調査のお手伝いもしており、月に一度豊栄町の椋梨川に入りオオサンショウウオを捕獲し、マイクロチップによって体重や全長の計測、傷の確認などを継続的に行っています。オオサンショウウオは大昔から姿を変えず、「生きた化石」と呼ばれており、国の特別天然記念物にも指定されています。とても貴重な生き物ですが、川の工事などの影響で減少しつつあります。この生き物の存在や置かれている状況を知ってもらうため、地元の小学生と幼生の放流や、へそ祭りでブースの展開を行いました。これからも地域の人たちとの関わりを大切に、活動を続けていきたいと思ひます。



理学部2年  
柳 拓明

### KEEPの取り組み

私たち広島大学霞清掃サークルKEEPは、学生の意識向上を目標に掲げ、主に霞キャンパス内の清掃活動を行っています。学生生活を送る中で抱いた、自分も他の学生も将来医療に従事する者としての自覚をもっと養うべきである、という考えが団体発足のきっかけとなっています。

具体的な活動としては、キャンパス内でゴミなどの汚れを見つけては、メンバーを集めて綺麗にするということを続けています。人の目につくところはもちろん、建物の裏など、なかなか人の手が届かないところの清掃も行っています。清掃するといってもただ綺麗にするだけでなく、他の学生に、同じ霞キャンパスの学生が清掃する姿を見せることで、身の回りを清潔に保とうという意識を持ってもらうことも目的としています。また、2年次の人体解剖実習のためにご献体頂いた方やそのご家族に対する感謝の気持ちから、献体慰霊碑周辺の草むしりも行っています。

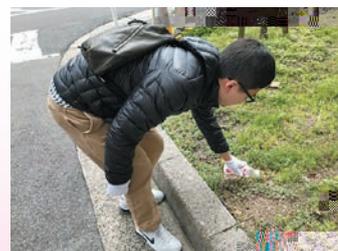
近頃は、キャンパス内だけでなくキャンパス外での清掃活動も行っています。東広島キャンパスの学生団体とともに東広島キャンパスの学園祭にてゴミの回収を行ったり、広島東洋カーブ優勝祝いで街に散乱したゴミを収集したりしました。

今後も息長く活動して、団体発足当初の思いを、多くの学生に伝えていきたいと思っています。

(医学部5年 安永 研人)



清掃活動後の集合写真



清掃活動の様子

## 2017年度 学生環境委員会・サポーターの活動

私たち、広島大学学生環境委員会・サポーターは、広島大学環境マネジメント委員会において策定された「環境目標」(環境教育・研究の推進, 社会貢献の推進, 自然環境の保全, 資源の有効利用の推進)を達成するために学生が主体となって活動しています。大学生や地域の方などに向けた企画を考えたり, 大学内外の環境に関係する活動に参加したりしています。また, 学生の活動だけでなく, 大学の組織として大学やその施設と連携した活動も行っています。ここでは, 私たちが行った活動について紹介したいと思います。

### 環境教育

東広島キャンパスにはビオトープがあるなど自然に溢れています。東広島市が主催の「ひがしひろしま子どもエコ探検隊」に参加し, 其中で, キャンパス内の自然に触れる自然観察会を行い, この豊かな自然を体験してもらいました。参加した子供達にとって, 身近な自然に愛着を持ち, 環境を守り続けるために自分たちができることを考えるきっかけになったと思います。

また, 「東広島ひとむすび」さんと協力してひとむすびさん主催のイベント「田植え&川の生き物観察会」の中で, 子供達と一緒に川の生き物を観察しました。

その他にも, 子供達と東広島キャンパス内の植物を観察し, それらを使って一緒にクリスマスリースを作りました。

### 社会貢献の推進

東広島市が主催する「きれいなまちづくりキャ



東広島キャンパス内の植物を観察中

ンペーン」に参加して, 自分たちが暮らしている町の清掃に取り組み, 地域の方たちと一緒に活動できるように交流を深めています。

### 自然環境の保全

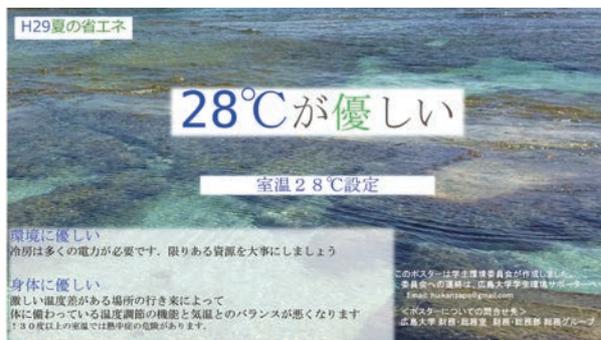
中央図書館前の花壇整備など, 学内の緑化ボランティアに参加しました。

### 資源の有効利用の推進

学生や教職員に省エネを意識してもらうようにエアコンの温度設定についてのポスターを作成しました。

大学内外の様々な分野の人たちと活動を行うことで, 自分たちの活動に生かせる経験を得ることができました。今後も, 様々な企画, 行動を学生ならではの多角的な視点から行っていきたく思います。学生環境委員会・サポーターをよろしくお願ひします。

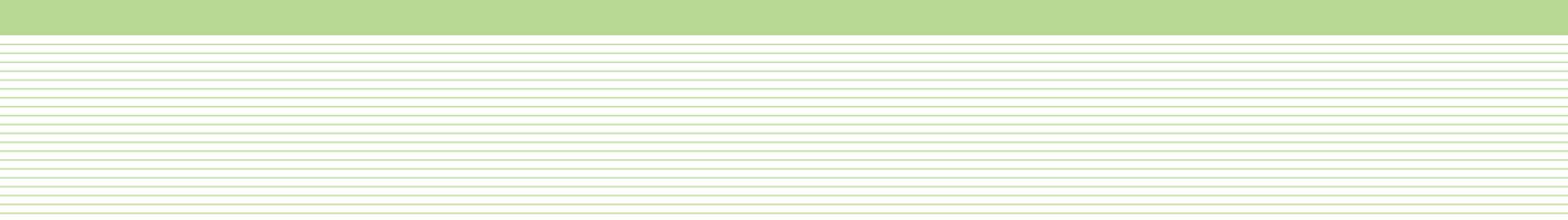
生物生産学部4年  
高野 智弘



夏季省エネポスター



冬季省エネポスター



## キャンパスの哺乳類調査

私は、東広島キャンパスにどのような哺乳類が生息しているか調査を行いました。そう言うとき多くの人は学内に哺乳類なんかいるの？と聞いてきます。確かに、日常の中で出会う機会はないかもしれませんが、しかしキャンパスの中には、確認できただけでも12種の哺乳類が生息しているのです。

まず、最も数が多いのはネズミです。これまで3種のネズミが確認されましたが、中でもアカネズミは分布が広く、森、川、畑、池のほとりとキャンパスのどこでも見ることが出来ます。ネズミがいれば当然それを食べる動物もいます。獣道にカメラを仕掛けておくと、イタチ、テン、タヌキ、



学内で活動するタヌキ

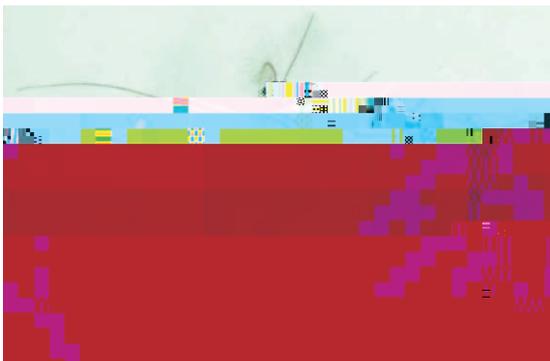
キツネが学内を闊歩している様子が写っています。また、普段目にしない身近な場所にも哺乳類が住んでいます。足元に張り巡らされたトンネルの中にはヒミズやジネズミが、建物のわずかな隙間にはアブラコウモリが潜んでいます。このように様々な哺乳類が生息することは、キャンパス内の生物多様性の高さを示していると言えるでしょう。

理学研究科 博士課程後期1年  
逸見 敬太郎

一方で、キャンパスには他の生き物を脅かす動物もいます。野生化したイヌとネコが確認されているのです。ある時、センサーカメラに東広島キャンパスでは初確認のヒクイナという鳥が写りました。その1週間後、同じ場所でネコがヒクイナを咬んでいる様子が撮影されました。それ以降、その場所にヒクイナが現れることはありませんでした。このように、ネコはしばしば他の動物を狩っています。今後、その影響を注視していく必要があるでしょう。

## 東広島キャンパスのユスリカ

皆さんは池や川、水田の周りで蚊によく似た小さな虫がたくさん群れで飛んでいるのを見たことがないでしょうか。おそらくその昆虫の多くはユスリカです。ユスリカは蚊に近い仲間です。日本では約1,200種が確認されています。その幼虫の多くは水中で生活しており、河川や湖沼、潮間帯などに生息し、種によって好む環境が大きく異なります。このことから生息地の環境を示す生物(環境指標生物)として注目されており、特に河川や



ぶどう池で見られるヒゲユスリカ属の一種

湖沼の水質指標として利用されています。

東広島キャンパスではこれまでに約150種のユスリカを確認しています。冬の晴れた日にはピロウドエリユスリカが舞い、早春には大型のキザキユスリカがぶどう池に現れ、3月の下旬頃にはヒゲユスリカ属の仲間(図参照)が一斉に羽化するといったように、キャンパス内ではほぼ一年中ユスリカの成虫を観察することができます。キャンパス内で見られるユスリカには、きれいな川を好むものから汚い水や水田・湿地を好むものまで、様々な環境に生息する種が含まれています。このことは、東広島キャンパスに溪流や湿地、池などの多様な水環境が維持されていることを示しているといえるでしょう。このように、普段気にならないような小さな虫からも東広島キャンパスの環境の豊かさを垣間見ることができます。

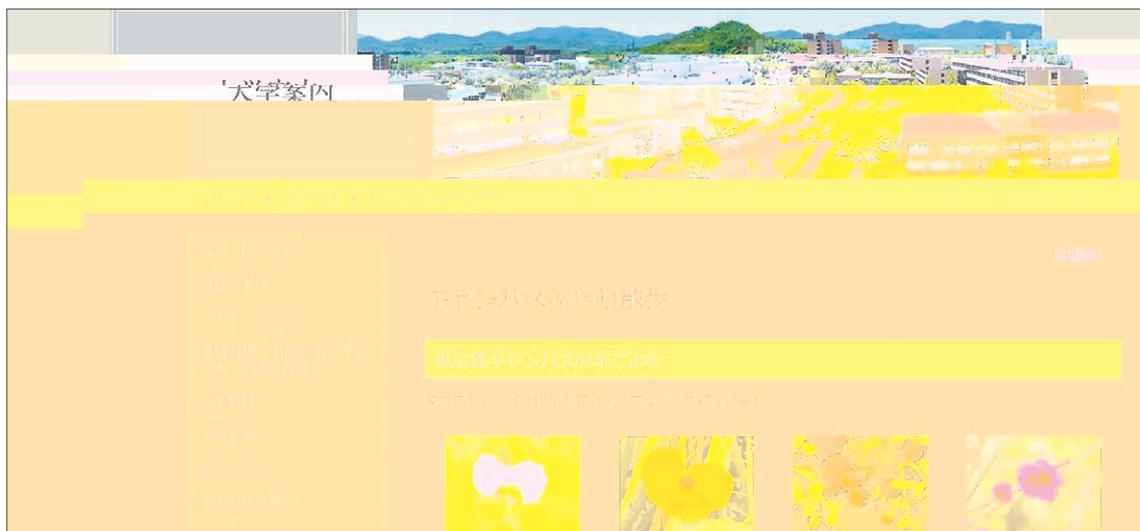


生物園科学研究科 博士課程前期2年  
児玉 敦也

# 自然環境

## キャンパスぶらり散歩 –HPによる情報公開–

広島大学HPの施設案内の項目にキャンパスぶらり散歩というページがあります。ここでは、キャンパスの自然や風景といった東広島キャンパスの見どころを情報公開しています。この中にキャンパスの花ごよみ、広島大学櫻曼荼羅、キャンパスの生き物の3つのコンテンツがあり、今キャンパスで見ることのできる動植物について、その時期ごとに紹介しています。



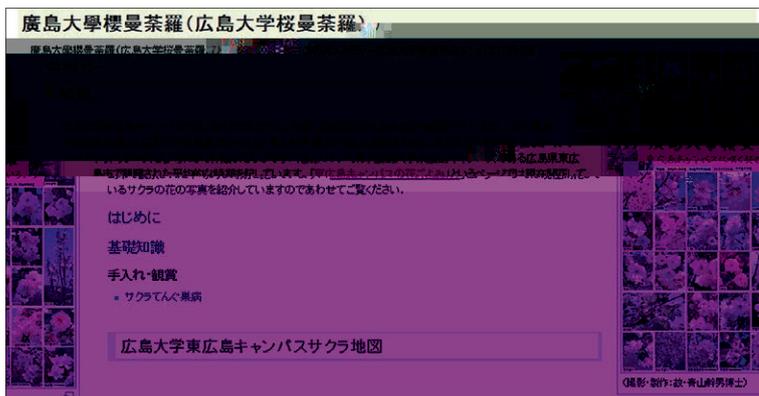
### キャンパスの花ごよみ

東広島キャンパスの管理区に植栽されている樹木、草本類と自然区、半自然区に生育している樹木、野草など、キャンパスで見られる植物について、花や実の情報を提供しています。サクラの開花情報や秋の紅葉などについても情報を得ることができます。



### 広島大学櫻曼荼羅

広島大学東広島キャンパスでは、2017年末までに、78種・品種総計約1,300本のサクラが植樹されています。「広島大学櫻曼荼羅」は広島大学の職員であった故・青山幹男博士が残した遺稿をもとに作成したものです。このページでは、東広島キャンパスのサクラ71品種について詳しく解説し紹介しています。



### キャンパスの生き物

東広島キャンパスには、大学の移転前から続いてきた里山の生態系が残され、小規模ではありますが、森林、草原、小川、ため池、湿地など多様な環境がモザイク状に存在します。そこには、それぞれの環境に適応した多様な生き物が暮らしており、キャンパスの生き物の暮らしぶりを四季とともに紹介しています。



キャンパスぶらり散歩

[https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/photo\\_gallery](https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/photo_gallery)

(文：技術センター技術専門員 塩路 恒生)



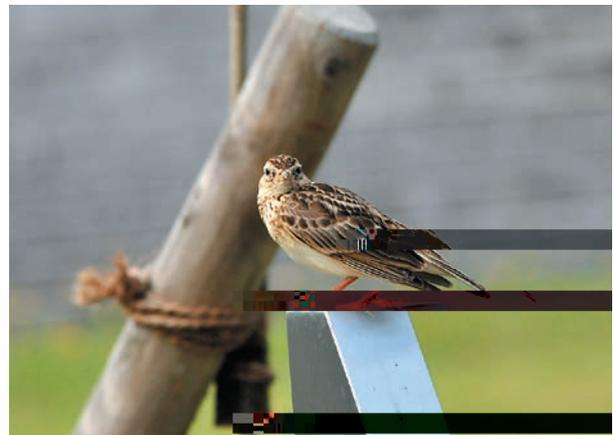
クサギ（臭木）の花とクロアゲハ（黒揚羽）



ヒメコウゾ（姫楮）の实

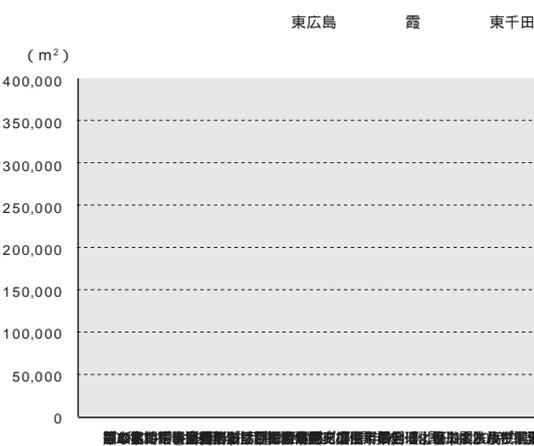
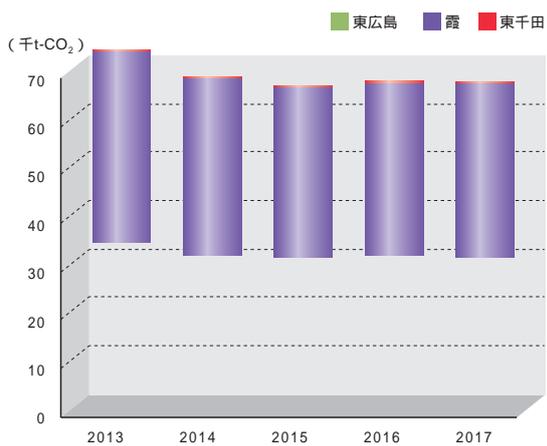
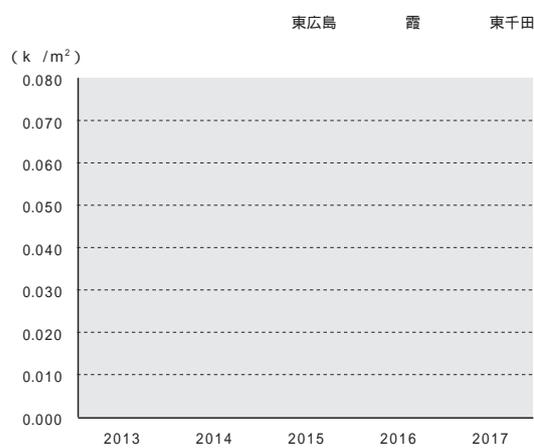
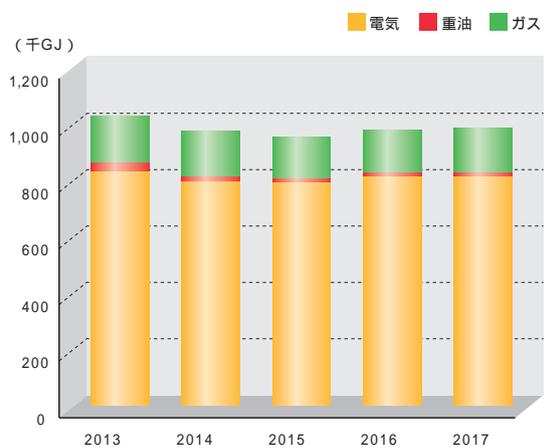


イシモチソウ（石持草）の花



ヒバリ（雲雀）

# 環境負荷削減



## 水投入量と削減対策

本学が行っている教育，研究，診療等の事業活動に伴って使用した水は，24ページの「2017年度の全学物質収支量」に示すとおりです。基本的には地方公共団体から供給される上水を使用していますが，東広島キャンパス及び霞キャンパスでは，水の循環的利用として中水及び雨水を処理し，再利用水として樹木の散水等で利用しています。

2017年度の環境目標の一つとして，水使用量を2012年度及び2016年度実績より削減することを掲げ，全学を挙げて水使用量の削減に努めました。具体的には，各部局等における節水啓発ポスターの掲示，教授会等による周知徹底，トイレの洗浄水の水量調整，実験用冷却水循環装置の利用等の活動を実施した結果，大学全体として，2012年度比10.4%，2016年度比1.5%の削減を達成することができました。

### 主要3キャンパスの水使用量及び排水量の年度推移

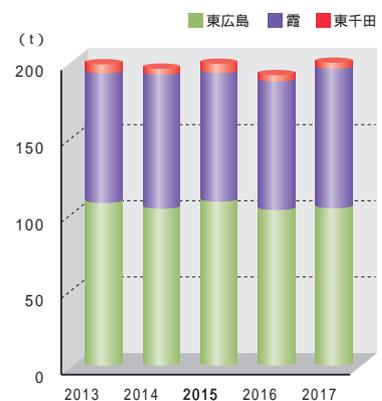
(凡例： 東広島 霞 東千田)



## コピー用紙購入量と削減対策

本学の教育，研究，診療等の事業活動に伴って使用するコピー用紙は，一年間で221,106kgでした。2017年度の環境目標の一つとして，コピー用紙を2014年度及び2016年度実績より削減することを掲げ，各部局において使用量削減対策に取り組みました。

具体的には，会議録の学内ポータルサイト掲載，タブレット型情報端末等を利用したペーパーレス会議の導入による配付資料の削減，パソコンの印刷設定変更による両面コピー・集約コピーの徹底などの活動を継続的に実施しましたが，大学全体としては，2014年度比で4.0%の増と2016年度比で3.9%の増という結果になりました。



主要3キャンパスのコピー用紙購入量 年度推移

# 環境負荷削減

## 廃棄物発生量と削減対策

本学の教育，研究，診療等の事業活動に伴って排出される廃棄物は，可燃ごみ，生活系プラスチック類などの一般廃棄物，実験・研究等で使用したプラスチック類などの産業廃棄物や，実験・研究等で発生した廃液，感染性産業廃棄物等などの特別管理廃棄物があります。2017年度の廃棄物（一般廃棄物，産業廃棄物，特別管理廃棄物）の量は，24ページの「2017年度の全学物質収支量」に示すとおりです。

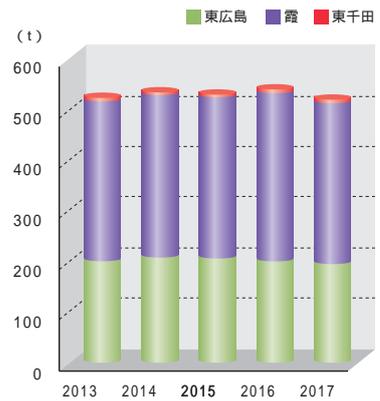
廃棄物については，環境目標に「廃棄物の削減と資源化の推進」を掲げ，2017年度は，「資源化促進による可燃ごみ排出量の削減」を主テーマとして，「2015年度比2%削減」「2021年度までに2008年度実績まで削減」を目標として努めてまいりました。この目標を達成するために「可燃ごみに混ざった資源ごみの分別指導の徹底」「学内掲示板（いろは）を利用した不要物品の有効活用推進」「ポスター等による啓発活動」等により，可燃ごみ削減と紙の再資源化の促進に努めました。

東広島地区においては，可燃ごみのうちの紙ごみについては，機密扱いのものについてはシュレッダー処理し破碎紙として，新聞紙，雑誌，段ボールや包装紙等については取りまとめて回収し，リサイクル業者へ売払いを行い，さらに，ペットボトルのリサイクルについても実施しており，ごみの削減に努めました。

また，可燃ごみ排出量を削減するために，22ページにあるように，コピー用紙の削減対策として，会議録の学内ポータルサイト掲載，タブレット型情報端末等を利用したペーパーレス会議の導入による配付資料の削減，パソコンの印刷設定変更による両面コピー・集約コピーの徹底などの活動を継続的に実施しています。

さまざまな取組の結果として，可燃ごみ廃棄量は2008年度比で0.5%増になりましたが，2015年度比では2.3%減になりました。

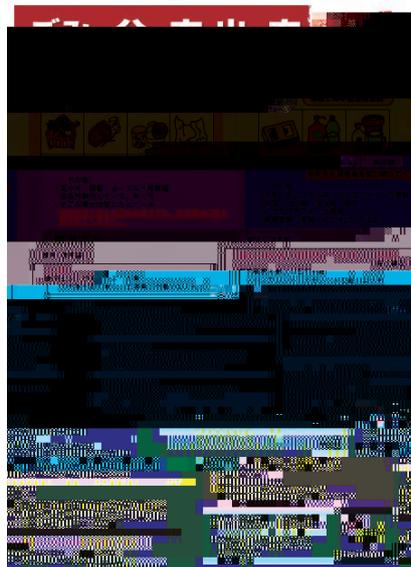
「混ぜればごみ，分ければ資源」の言葉通り，ごみは出す人がきちんと分別すれば，資源として再利用することができますし，廃棄物の削減にもつながります。今後とも，ごみの分別についての啓発活動をより一層徹底し，廃棄物の減量及び再資源化に努めます。



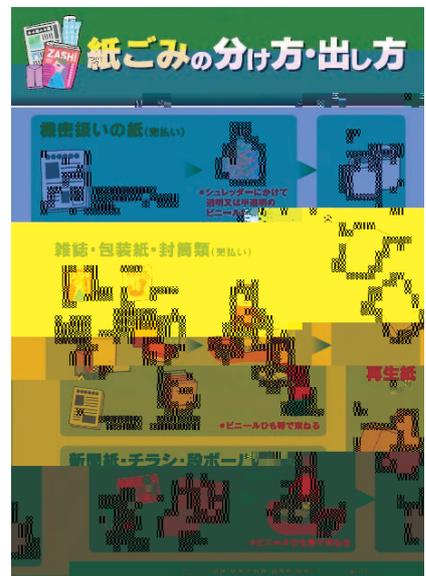
主要3キャンパスの可燃ごみ廃棄量 年度推移



ごみ分別ポスター（東広島キャンパス）



ごみ分別ポスター（霞キャンパス）



紙ごみ分別ポスター

(ポスター掲載先 URL : <https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/initiatives/kankyo>)

## マテリアルバランス

本学は、広島県下に27地区（宿舍専用地区を含む）、土地面積3,138,533㎡、建物施設延べ面積665,251㎡を有する大規模な事業所であり、その中で約23,000人の構成員が、教育・研究・診療・社会貢献等の事業活動を行う過程で、多くのエネルギー等を投入（INPUT）し、温室効果ガス等、環境に負荷を与える物質を排出（OUTPUT）しています。下表に、2017年度の全学物質収支量をまとめました。また、水の循環利用（中水・雨水）や古紙回収による資源化など、循環的利用を行っている物質についても併せて示しています。

次ページに示す表は、主要3キャンパス（東広島キャンパス、霞キャンパス、東千田キャンパス）の物質収支量について、過去5年分の年度推移を記載しています。

### 2017年度の全学物質収支量

収 支	種 類	種 別	計	合 計
INPUT	エネルギー (熱量換算)	電気	833,415 GJ	1,008,960 GJ
		重油	15,441 GJ	
		ガス	160,104 GJ	
	水	上水		607,784 m <sup>3</sup>
	物質	コピー用紙		221,106 kg
OUTPUT	排水	下水		513,842 m <sup>3</sup>
	廃棄物	一般廃棄物		906,658 kg
		産業廃棄物		1,048,297 kg
		特別管理産業廃棄物		817,366 kg
	温室効果ガス <sup>*1</sup>			68,417 t-CO <sub>2</sub>
循環的利用	中水使用量			106,595 m <sup>3</sup>
	雨水使用量			7,815 m <sup>3</sup>
	古紙回収量（廃コピー用紙を回収し、製紙工場に搬入する量及び破砕紙を資源化物として売払いした量）			110,878 kg

\*1 温室効果ガス排出量は、2017年度排出係数で算出

### グリーン購入について

本学では、「国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律」（グリーン購入法）に基づき、年度ごとに環境物品等の調達の推進を図るための方針（調達方針）を定めています。

2017年度においても、環境に配慮した物品等の調達目標を掲げ、物品等を納入する事業者、役務の提供事業者、公共工事の請負事業者等に対しても、事業者自身が本学の調達方針に準じたグリーン購入を推進するよう働きかけを行うなど、グリーン購入の推進を図りました。

その結果、調達総量に対する基準を満足する物品等の調達量の割合により目標設定を行う品目については、当初の年度調達目標（100%）を達成し、その他の物品・役務の調達に当たっても、できる限り環境への負荷の少ない物品等の調達に努めました。

# 環境負荷削減

東広島	収支	種別	2013	2014	2015	2016	2017	目標	
	INPUT	電気 (GJ)		407,792	389,550	390,709	399,473	394,334	2015年度比 2%
重油 (GJ)			21,392	15,667	13,785	13,473	15,441		
ガス (GJ)			21,525	19,010	19,994	21,959	22,886		
		上水 (m <sup>3</sup> )		298,537	312,612	282,026	264,794	266,913	2012年度及び2016年度より減
		コピー用紙 (kg)		107,340	103,538	108,171	102,667	103,861	2014年度及び2016年度より減
OUTPUT		排水 (下水) (m <sup>3</sup> )	228,486	219,841	231,745	247,735	202,611		
		一般廃棄物 (kg)	273,195	245,270	246,602	234,583	229,225	可燃ごみ2008年度より減及び2015年度比 2%	
		産業廃棄物 (kg)	569,246	547,734	524,612	542,359	742,248		
		特別管理産業廃棄物 (kg)	49,598	26,858	35,408	37,047	30,780		
		温室効果ガス (t-CO <sub>2</sub> )	33,514	30,752	30,442	30,784	30,352		
循環利用		中水使用量 (m <sup>3</sup> )	66,409	67,494	84,696	86,060	79,816	再利用の促進	
		雨水使用量 (m <sup>3</sup> )	1,204	中水に合算	中水に合算	中水に合算	中水に合算	"	
		古紙回収量 (kg) * <sup>1</sup>	46,398* <sup>2</sup>	47,921* <sup>2</sup>	46,860* <sup>2</sup>	52,837	49,458		

霞	収支	種別	2013	2014	2015	2016	2017	目標
	INPUT	電気 (GJ)		410,114	396,375	387,147	387,147	387,147


\*<sup>1</sup> 2013年4月から古紙回収事業を破砕紙の資源化物売払いに移行しました。

\*<sup>2</sup> 破砕紙を資源化物として売払いした量

# 環境リスク低減

本学における自然科学系を中心とした最先端の研究活動は、多種多様な化学物質の使用や高度な研究設備によって行われています。一方で、化学物質の使用方法や廃棄方法を誤ると、研究者自身のみならず周辺住民に対しても大きな危害が及ぶ可能性を孕んでいます。さらに、高圧ガスや放射性同位元素を使用した高度な実験設備等の不適切な扱いが、爆発事故、放射線障害、火災等の深刻な事態に結びつく可能性もあり、キャンパス内外の周辺環境にとっても大きなリスクとなります。本学では、安全衛生管理体制を整え、様々なリスクの低減に向けた取組を行っています。ここでは、本学の安全衛生管理体制、化学物質等の管理、実験廃液の管理について報告します。

## 安全衛生管理体制

本学では、広島大学安全衛生管理委員会の下、7つの地区（東広島、霞、東千田、翠、東雲、三原、福山）に、

# 環境リスク低減

## 化学物質等の管理

本学では、「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律」(PRTR法)の第一種指定化学物質及び第二種指定化学物質及びその他の有害化学物質の管理に係る措置を定めています。本学の事業活動(教育・研究・診療等)に伴って発生する化学物質の公共水域や大気への排出量を抑制するため、これまでに実験手順の見直しや実験廃液管理の徹底等を実施してきました。

また、「広島大学化学情報支援システム」(薬品管理システム)により、毒物・劇物の使用量管理の徹底を図るほか、一般試薬についても、薬品管理システムによる化学物質管理を利用することによって、学内の化学物質の所在(場所・数量)及び使用量、購入量等の管理を実施しています。

今後も、本学の事業活動(教育・研究・診療等)に伴い発生する化学物質の管理の徹底に取り組みます。

### PRTR法に基づく化学物質の届出状況

毎年、「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律」(PRTR法)に従い、届出が義務付けられている化学物質の年間使用量について、薬品管理システムからのデータ抽出と、年間使用量調査を組み合わせて把握しています。

2017年度のPRTR対象物質の排出量及び移動量は、以下のとおりです。

地区	物質名	排出量				移動量	
		大気	公共用水域	土壌	埋立処分	下水道	事業所外
東広島 <sup>1</sup>	クロロホルム	34	0	0	0	1.6	3300
	ジクロロメタン	65	0	0	0	2.5	2000
	ノルマルヘキサン	11	0	0	0	76	1900
霞 <sup>2</sup>	キシレン	16	0	0	0	23	1400

単位：kg

<sup>1</sup>：2016年度届け出たトルエンは、2017年度届け出数量基準以下。

2016年度届け出たダイオキシン類は、2016年度末で焼却炉廃止のため、2017年度の排出及び移動は無し。

<sup>2</sup>：2016年度届け出たクロロホルムは、2017年度届け出数量基準以下。

## 実験廃液処理・管理

実験によって発生した廃液を効率よく安全に処理するためには、処理方法に応じて廃液を分別する必要があります。分別が十分でない場合、廃液中の汚染物質を完全に除去できない、有毒ガスの発生等により廃液取り扱い者の生命が危険にさらされる等の支障を来す恐れがあります。

そこで本学では、実験によって発生した化学物質を含む全ての廃液と、廃液が入っていた容器の2回のすすぎ水は、所定の分別方法に従って種類ごとの廃液タンクに貯留し、これを定期的に回収して専門業者により学外で処理しています。実験廃液の分類方法についてはポスターを作成して各研究室等に配付するほか、環境安全センターの担当者による実験廃液の取扱方法や実験廃液の回収手続きに関する講習会を定期的に開催し、廃液管理の徹底を図っています。講習会の内容は、動画とテキストを含む形で本学のBb9にも掲載しています。

なお、東広島キャンパスでは、薬品の不適切な取扱いや事故等による化学物質の流出を防ぐことと、水資源の循環利用の観点から、実験廃液とすすぎ水以外の実験で使用した水(実験器具浄水等)は、一般実験系排水として回収して環境安全センターにおいて処理し、中水として学内にて再利用しています。

2017年度の地区別廃液回収実績は、以下のとおりです。

地区	有機性廃液 <sup>*1</sup>	無機性廃液 <sup>*2</sup>	固形廃棄物(kg)
東広島	35,081	20,358	2,139
霞	22,956	521	95
附属学校園	97	200	6

\*1 有機性廃液：難燃性廃液，自然性廃液，ハロゲン含有廃液，廃油

\*2 無機性廃液：重金属廃液，溶存無機水銀廃液，ヒ素廃液，シアン廃液，フッ素廃液



廃液回収作業の様子



# 環境報告ガイドライン(2012)との対照表

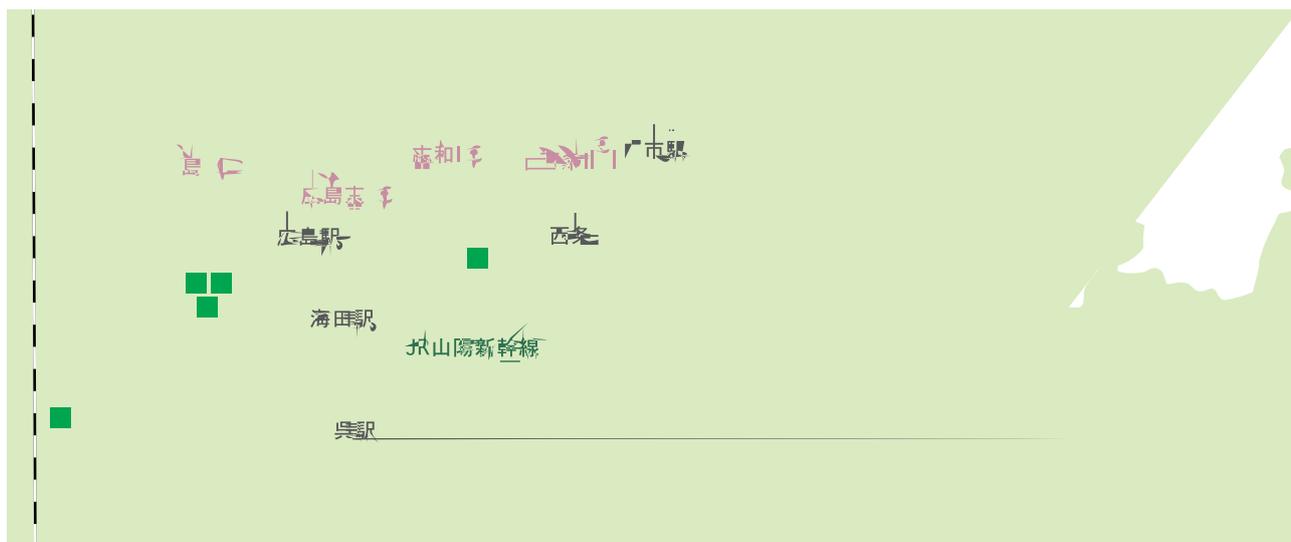
「環境報告ガイドライン」は、事業者が環境を利用するものとしての社会に対する説明責任を果たし、かつ環境報告が有用となるための指針として作成されており、2012年4月に2012年版が公表されました。このガイドラインに記載された5分野40項目と、本報告書の記載内容との対照表は、以下のとおりです。

環境報告ガイドラインにおける項目		掲載ページ
<b>環境報告の基本的事項</b>		
1. 報告にあたっての基本的要件	(1) 対象組織の範囲・対象期間	1
	(2) 対象範囲の捕捉率と対象期間の差異	-
	(3) 報告方針	1
	(4) 公表媒体の方針等	1
2. 経営責任者の緒言		2
3. 環境報告の概要	(1) 環境配慮経営等の概要	4
	(2) KPI <sup>1</sup> の時系列一覧	25
	(3) 個別の環境問題に関する対応総括	6
4. マテリアルバランス		24
<b>「環境マネジメント等の環境配慮経営に関する状況」を表す情報・指標</b>		
1. 環境配慮の取組方針、ビジョン及び事業戦略等	(1) 環境配慮の取組方針	3
	(2) 重要な課題、ビジョン及び事業戦略等	-
2. 組織体制及びガバナンスの状況	(1) 環境配慮経営の組織体制等	5
	(2) 環境リスクマネジメント体制	26
	(3) 環境に関する規制等の遵守状況	28
3. ステークホルダーへの対応の状況	(1) ステークホルダーへの対応	-
	(2) 環境に関する社会貢献活動等	13-16
4. バリューチェーンにおける環境配慮等の取組状況	(1) バリューチェーンにおける環境配慮の取組方針、戦略等	-
	(2) グリーン購入・調達	24
	(3) 環境負荷低減に資する製品・サービス等	7-12
	(4) 環境関連の新技术・研究開発	10-12
	(5) 環境に配慮した輸送	-
	(6) 環境に配慮した資源・不動産開発/投資等	-
	(7) 環境に配慮した廃棄物処理/リサイクル	22, 23
<b>「事業活動に伴う環境負荷及び環境配慮等の取組に関する状況」を表す情報・指標</b>		
1. 資源・エネルギーの投入状況	(1) 総エネルギー投入量及びその低減対策	21, 24
	(2) 総物質投入量及びその低減対策	22, 24
	(3) 水資源投入量及びその低減対策	22, 24
2. 資源等の循環的利用の状況		22, 24
3. 生産物・環境負荷の産出・排出等の状況	(1) 総製品生産量又は総商品販売量等	-
	(2) 温室効果ガスの排出量及びその低減対策	21
	(3) 総排水量及びその低減対策	22
	(4) 大気汚染、生活環境に係る負荷量及びその低減対策	27
	(5) 化学物質の排出量、移動量及びその低減対策	27
	(6) 廃棄物等総排出量、廃棄物最終処分量及びその低減対策	23-25
	(7) 有害物質等の漏出量及びその防止対策	26
4. 生物多様性の保全と生物資源の持続可能な利用の状況		17-20
<b>「環境配慮経営の経済・社会的側面に関する状況」を表す情報・指標</b>		
1. 環境配慮経営の経済的側面に関する状況	(1) 事業者における経済的側面の状況	-
	(2) 社会における経済的側面の状況	-
2. 環境配慮経営の社会的側面に関する状況		13-20
<b>その他の記載事項等</b>		
1. 後発事象等		-
2. 環境情報の第三者審査等		6, 30

<sup>1</sup> KPI: Key Performance Indicator の略「重要業績評価指標」と訳される。環境配慮経営における重要課題について、環境配慮等の取組状況や関連する事業活動の経過、業績、現況を効果的に計測できるような定量的指標のこと。



# キャンパスマップ



- |  |                   |                  |                   |
|--|-------------------|------------------|-------------------|
| 1 東広島キャンパス                                 | 2 霞キャンパス          | 3 東千田キャンパス       | 4 翠地区( 附属学校 )     |
| 5 東雲地区( 附属学校 )                             | 6 宮島地区( 自然植物実験所 ) | 7 呉地区( 練習船基地 )   | 8 西条三永地区( 総合運動場 ) |
| 9 サイエンスパーク地区( 産学共同研究オフィス , インキュベーションオフィス ) |                   |                  |                   |
| 10 竹原地区( 瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター )             | 11 三原地区( 附属学校 )   | 12 向島地区( 臨海実験所 ) |                   |
| 13 春日地区( 附属学校 )                            | 14 東広島天文台         | 15 西条サテライトオフィス   | 16 福山サテライトオフィス    |
| 17 東広島地区( 附属学校 )                           |                   |                  |                   |

## 東広島キャンパスの学部・研究科

- ・総合科学部
- ・文学部
- ・教育学部
- ・法学部( 昼間コース )
- ・経済学部( 昼間コース )
- ・理学部
- ・工学部
- ・生物生産学部
- ・大学院総合科学研究科
- ・大学院文学研究科
- ・大学院教育学研究科
- ・大学院社会科学研究科
- ・大学院理学研究科
- ・大学院先端物質科学研究科
- ・大学院工学研究科
- ・大学院生物圏科学研究科
- ・大学院国際協力研究科

## 東千田キャンパスの学部・研究科

- ・法学部( 夜間主コース )
- ・経済学部( 夜間主コース )
- ・大学院社会科学研究科
- ・大学院法務研究科

## 霞キャンパスの学部・研究科等

- ・医学部
- ・歯学部
- ・薬学部
- ・大学院医歯薬保健学研究科
- ・原爆放射線医科学研究所
- ・病院

## 編集後記

「環境報告書2018」を刊行しました。昨年の編集後記では異常気象に触れましたが、今年もまた異常気象です。今年7月の西日本の豪雨では、多くの命が犠牲になり、甚大な被害が出ました。JR や道路、水道なども復旧の兆しがあるものの、未だ途上です。今回の災害で感じたことは「情報」です。情報の出し方、受けとり方にとどまらず、過去の情報を適切に生かすことができたか？ここが様々な対応やその後に影響を与えたように感じています。

今年度の環境報告書から冊子体の印刷物をとりやめ、PDF ファイルでの発行のみとしました。様々な意見や影響があることを理解しつつ、学生の PC 必携化・ペーパーレ

スなど大学全体での情報化や環境負荷削減への取り組みなどを踏まえ決断しました。本報告書の目的は本学の環境に対する考え方、取り組みを明らかにするとともに、それらを定期的に見直し、学内の環境意識を高めるという役割があります。本報告書が学内外に対して有用な情報を提供しているか？それらの情報は利用しやすく活用されているか？これらの点は絶えず意識しなくてはならないことと思っています。本報告書が社会と大学に価値ある情報の一つになればと思っています。

環境報告書作成専門委員会委員長 竹田 一彦

## 環境報告書作成専門委員会：

竹田 一彦(委員長 / 生物圏科学研究科准教授)・浅野 敏久(総合科学研究科教授)・藤原 好恒(理学研究科准教授)・小倉 亜紗美(平和センター助教)・西嶋 涉(環境安全センター教授)・塩路 恒生(技術センター技術専門員)・小林 啓二(施設整備グループリーダー)



# Environmental Report 2018

お問い合わせ先

---

国立大学法人広島大学 財務・総務室 財務・総務部 総務グループ

TEL : 082-424-4474

